

[機密レベル Ω — 最高幹部以上閲覧許可]

IHCRI Bulletin, Vol.69, No.3, pp.1-48, 暗黒暦 217 年

暗黒新時代白書

— —

ヒロイン分類学に基づく体系的攻略戦術の実証的成果 と勝利時代の諸問題

*White Paper on the New Dark Age: Empirical Outcomes of Systematic Tactics Based on Heroine
Taxonomy and Emerging Issues in the Era of Victory*

暗黒 絶学（くらき ぜつがく）・深淵峰 奇麗（しんえんばち きれい）
統合悲嘆機構デスペラード ヒロイン対策総合研究所（IHCRI）

暗黒暦 217 年 第三四半期報告

受理日：暗黒暦 217 年 2 月 30 日 掲載決定日：暗黒暦 217 年 3 月 45 日

※本稿は悲嘆学会第 89 回大会・特別シンポジウム「勝利の悲嘆学」における発表を元に大幅加筆したものである

要旨 (Abstract)

本白書は、暗黒暦 214 年に刊行された暗黒 (214) による「ヒロイン分類学序説」およびその体系的攻略法が、統合悲嘆機構デスペラードの全支部において実装されて以降の 3 年間 (暗黒暦 214-217 年) における戦果データを包括的に分析し、その実証的成果と新たに顕在化した諸問題を報告するものである。

分類学的アプローチの導入以前、デスペラード全体のヒロイン攻略作戦成功率は 3.2% (暗黒・蛍火, 213) という壊滅的数値であった。本稿の分析により、分類学導入後の平均作戦成功率は 41.7%へと飛躍的に上昇し、特にヒロイン初期接触フェーズにおける制圧成功率は 78.3%を記録したことが明らかとなった (n=2,847 作戦、 $p<.001$)。光輝型ヒロインに対する「変身バンク妨害プロトコル」の実施により、変身完遂阻止率は従来の 0.8%から 62.4%へと劇的に改善された。

しかしながら、この歴史的勝利の裏で、予期せぬ深刻な問題群が噴出している。本白書では、これらを「勝利のパラドクス」として理論的に整理し、(1) ヒロインの加速度的適応進化、(2) 組織内の勝利後虚脱症候群 (Post-Victory Void Syndrome: PVVS) の蔓延、(3) 予算縮小圧力、(4) 「第六分類」出現の兆候という 4 つの危機的課題を報告する。

キーワード：ヒロイン分類学、作戦成功率、勝利のパラドクス、PVVS、第六分類、フェニックス現象、暗黒新時代

1. 序論 ―― 敗北の歴史と暗黒新時代の幕開け

統合悲嘆機構デスペラードの歴史は、率直に述べるならば、敗北の歴史であった。創設以来 200 年余にわたり、我が機構は世界征服という崇高なる使命のもと、幾多のヒロインと対峙してきた。しかし、その戦績は惨憺たるものであったことを、本白書の冒頭において率直に認めねばならない。

暗黒 (214) が詳細に分析したとおり、暗黒暦 213 年度における全作戦成功率は 3.2%であり、これは統計学的に「コインを 5 回連続で表にする確率」(3.125%) とほぼ同等であった。すなわち、精緻な計画を立案し、莫大な予算を投入し、巨大怪人を製造し、幹部が長大な作戦説明を行うという一連の手続きは、コインを投げるのと実質的に同じ期待値しか持たなかったのである。

この絶望的状况に革命的転機をもたらしたのが、暗黒暦 214 年に刊行された「ヒロイン分類学序説 ―― 分類群別脅威度評価および最適攻略法の体系的研究」(暗黒, 214) である。同論文は、ヒロインを光輝型・格闘型・魔法型・知性型・覚醒型の 5 分類に体系化し、各タイプ固有の弱点構造と最適攻略法を提示した画期的業績であった。

本白書は、同論文の知見がデスペラード全支部において実装されてから 3 年が経過した現在、その成果を包括的に検証するものである。結論を先取りすれば、分類学的アプローチは劇的な成果を上げた。しかし、勝利の時代は、我々が想像もしなかった新たなる問題群を産み落としたのである。

2. 研究背景 ―― 分類学の実装と組織改革

2.1 分類学教育プログラムの導入

暗黒暦 214 年第 3 四半期より、IHCRI 主導のもと「ヒロイン分類学基礎教育プログラム (通称: 分類学ブートキャンプ)」が全支部の戦闘員を対象に開始された。同プログラムは全 40 時間のカリキュラムから構成され、座学 20 時間 (分類理論・弱点構造論・フェニックス現象論) と実技 20 時間 (模擬戦闘・分類判定演習・集団戦術訓練) を含む。

特筆すべきは、従来の戦闘員教育において完全に欠落していた「集団戦術」の導入である。暗

黒（214）が指摘した「戦闘員はなぜ一列に並んで一人ずつ攻撃するのか」という構造的欠陥に対し、本プログラムでは「同時多方向攻撃（Simultaneous Multi-Vector Assault: SMVA）」戦術を標準化した。初年度の修了者は全支部合計で 12,847 名にのぼり、修了試験の平均得点は 78.4 点（標準偏差 9.2）であった。

2.2 「とどめ台詞禁止令」の施行

暗黒暦 215 年 1 月 1 日付で、デスペラード全組織に対し「総統令第 666 号：戦闘時不必要発話禁止令（通称：とどめ台詞禁止令）」が発令された。蛍火（213）の統計分析により、幹部がヒロインに対して勝利宣言や作戦説明を行った場合の逆転確率が 94.7%に達することが実証されていたためである。

同令の主要禁止事項は以下のとおりである。第一に、「ふふふ、もう終わりだ」等の勝利を前提とした発話の全面禁止。第二に、作戦の全容をヒロインに説明する行為の厳禁。第三に、ヒロインの変身が完了するまで攻撃を待機する「礼儀正しい待機」の廃止。第四に、止めを刺す直前に動機や身の上話を語る行為の禁止である。

本禁止令の施行に際しては、組織内から強い反発があったことを記しておくなければならない。特に中間管理職層（幹部クラス）からは「勝利宣言は幹部としてのアイデンティティの核心である」「部下の士気に関わる」との異議申し立てが相次いだ。暗黒暦 215 年 2 月には、第 7 支部の鉄仮面将軍が禁止令に抗議して長大な演説を行い、その最中にヒロインに逆転されるという皮肉な事態が発生している。

2.3 アンチ・トランスフォーム波発生装置の全支部配備

暗黒（214）が提唱した「変身バンク妨害」の概念を実装したアンチ・トランスフォーム波発生装置（AT 波装置）が、暗黒暦 215 年度の設備投資予算の 72.3%を占める大規模投資のもと、全支部に配備された。同装置は、ヒロインの変身シークエンス中に特殊な妨害波を照射し、変身プロセスを中断させることを目的とする。

装置の仕様策定にあたっては、IHCRI 音響光学研究室の協力のもと、変身バンク映像 1,247 件

の解析が行われた。その結果、変身シーケンスの平均所要時間は 47.3 秒であり、変身者が最も無防備となる「回転フェーズ」（開始から 12-18 秒）に妨害波を照射することが最も効果的であることが判明した（深淵蜂, 215）。

3. 結果 ―― 暗黒新時代の戦果データ

3.1 全体的作戦成功率の推移

分類学的アプローチの導入により、作戦成功率は劇的な改善を示した。表 1 に暗黒暦 212 年から 217 年にかけての年度別データを示す。

表 1：年度別作戦成功率の推移

年度	作戦総数	成功数	成功率	制圧率*	備考
暦 212 年	923	28	3.0%	8.7%	導入前
暦 213 年	891	29	3.2%	9.1%	導入前
暦 214 年	847	97	11.5%	24.3%	導入年
暦 215 年	1,024	338	33.0%	61.8%	全面展開
暦 216 年	1,156	582	50.3%	78.3%	黄金期
暦 217 年*	674	281	41.7%	58.9%	下降兆候

* 暦 217 年は第 3 四半期までのデータ。制圧率はヒロイン初期接触フェーズにおける一時的制圧の達成率。

暗黒暦 216 年度に記録された作戦成功率 50.3%は、デスペラード創設以来初めて「勝率が敗率を上回った」歴史的瞬間であり、同年 11 月 13 日は「勝利記念日」として機構の公式祝日に制定された。暗黒暦 216 年度の成功率 50.3%と導入前の 3.2%を比較すると、オッズ比は 30.4 (95%CI: 22.8-40.5) であり、分類学的介入の効果は統計的に極めて有意であった ($\chi^2=1,847.3$, $df=1$, $p<.0001$)。

しかし、暗黒暦 217 年度に入り成功率は 41.7%へと低下に転じている。この低下の原因分析は本白書の核心的課題であり、第 5 章で詳述する。

3.2 分類群別の成果分析

分類学的アプローチの真価は、分類群ごとの攻略効率の差異に明確に現れている。表 2 に暗黒暦 216 年度（黄金期）における分類群別データを示す。

表 2：分類群別攻略成功率（暗黒暦 216 年度）

分類群	対象数	成功率	導入前	主要有効戦術	課題
-----	-----	-----	-----	--------	----

光輝型	247	63.2%	1.8%	AT 波による変身阻止	闇属性耐性の獲得
格闘型	312	44.9%	4.1%	精神攻撃への移行	「怒り」による覚醒
魔法型	198	57.1%	2.7%	魔力枯渇の誘導	仲間との共鳴増幅
知性型	156	38.5%	5.3%	情報攪乱・孤立化	対策の知的解析
覚醒型	87	21.8%	1.1%	覚醒前の速攻制圧	予測不能な能力発現

光輝型に対する成功率が最も高い（63.2%）のは、AT 波装置の効果が最も顕著に現れたためである。光輝型ヒロインは変身シークエンスへの依存度が最も高く（変身前戦闘力は変身後の推定12.3%）、変身を阻止できれば制圧は比較的容易である。一方、覚醒型に対する成功率は21.8%にとどまった。覚醒型は暗黒（214）が「最も危険な分類群」と評価したとおり、ピンチ状態そのものが覚醒のトリガーとなるため、攻略すればするほど強くなるという根本的矛盾（ピンチパラドクス）を内包している。

4. 栄光の記録 ―― 代表的成功事例

4.1 事例 1：プリズムスター無力化作戦（暗黒暦 215 年）

光輝型ヒロイン「プリズムスター」に対する攻略は、分類学的アプローチの模範的適用例として広く知られている。従来、プリズムスターとの戦闘においてデスペラードは通算 0 勝 47 敗（勝率 0.0%）という完全敗北を記録していた。

分類学の知見に基づき、第 3 支部は以下の戦術を実施した。第一に、AT 波装置による変身シーケンス妨害。プリズムスターの変身バンクは 52 秒間に及ぶ長大なものであり、そのうち「七色の光を浴びながら回転する」フェーズ（15-32 秒）が最も脆弱であることが事前分析で判明していた。第二に、とどめ台詞の完全排除。作戦指揮官には発話禁止チップが装着され、物理的に勝利宣言が不可能な状態とした。第三に、SMVA 戦術による 16 方向同時攻撃の実施。

結果、プリズムスターの変身完遂を阻止し、非変身状態での制圧に成功した。しかしながら、本稿の執筆にあたり付記せねばならないのは、同作戦の成功から 73 日後、プリズムスターが「変身せずとも光は心の中にある」という新たな覚醒を遂げ、AT 波への完全耐性を獲得して復帰したことである。この事例は後述する「フェニックス現象の加速」の最初期の例として記録されている。

4.2 事例 2：第 12 支部における格闘型制圧率 82.1%の達成

第 12 支部は、分類学教育プログラムの優秀修了支部として知られ、暗黒暦 216 年度における格闘型ヒロインに対する制圧率が全支部最高の 82.1%を記録した。同支部の成功要因は、暗黒（214）が提唱した「格闘型には肉体戦闘を避けよ」という原則の徹底的遵守にある。

第 12 支部長・氷結卿の報告によれば、格闘型ヒロインとの遭遇時、戦闘員は一切の近接戦闘を回避し、精神攻撃（幻覚投射、記憶干渉、孤独感増幅）のみで対応する戦術を標準化した。従来、格闘型ヒロインとの戦闘で最も損害が大きかったのは「戦闘員がヒロインの攻撃を受けて吹き飛ばす」フェーズであり、この物理的接触がヒロインの士気を高め、逆転の契機を提供していたことが統計的に示されている（蛍火, 214）。

なお、第 12 支部の格闘型制圧率 82.1%は全支部平均を大幅に上回っているが、最終的な作戦成

功率（完全勝利）は 49.3%にとどまった。これは制圧後のフェーズにおいて、格闘型ヒロインの「仲間の声が聞こえて立ち上がる」現象（絆復帰効果）により 34.2%が逆転したためである。この現象への対策は現在も研究中である。

4.3 事例 3：魔法型ヒロイン「ルナ・セレスティア」との 96 時間消耗戦

暗黒暦 216 年、第 8 支部は魔法型ヒロイン「ルナ・セレスティア」に対し、分類学の知見を活用した史上最長の持久戦を展開した。魔法型の弱点は「魔力の有限性」であるという暗黒（214）の指摘に基づき、意図的に長期消耗戦を仕掛ける「枯渇戦術」が採用された。

96 時間にわたる継続的な低強度攻撃により、ルナ・セレスティアの魔力残量は推定 4.2%まで低下し、最終的に変身解除・倒伏状態に至った。IHCRI 観測班が記録したデータによれば、魔力の減衰曲線は指数関数的減少（ $y = 100e^{-0.047t}$ 、 t は時間）に従い、暗黒（214）の理論モデルとの適合度は $R^2=0.94$ であった。

ただし、本事例もまた完全な勝利には至らなかった。魔力が 0.3%まで低下した時点で、ルナ・セレスティアの使い魔である白猫「ミルフィーユ」が涙を流し、その涙が魔力の「種火」となって爆発的な魔力回復が生じた。最終的な魔力回復量は枯渇前の 247%に達し、我が第 8 支部は壊滅した。深淵蜂（216）はこの現象を「フェニックス現象の極端型」として分類し、「感情触媒型魔力回復」と命名している。

5. 考察 ―― 勝利のパラドクスと暗黒新時代の危機

前章までのデータが示すとおり、分類学的アプローチはデスペラードに歴史的な戦果をもたらした。しかし、暗黒暦 217 年度における成功率の低下 (50.3% → 41.7%) は、「勝利の時代」が新たな困難を内包していることを示唆している。本章では、この現象を「勝利のパラドクス (Victory Paradox)」として理論的に整理する。

5.1 第一の危機：ヒロインの加速度的適応進化

最も深刻な問題は、ヒロインたちが我々の戦術に対して驚異的な速度で適応していることである。暗黒暦 214 年の AT 波装置導入当初、光輝型ヒロインの変身阻止率は 62.4% を記録した。しかし暗黒暦 217 年現在、同数値は 23.1% まで低下している。

IHCRI 分析班の調査により、適応のパターンは 3 段階に分類されることが判明した。第一段階は「個体適応」であり、同一のヒロインが AT 波への耐性を獲得する現象である。第二段階は「情報共有適応」であり、あるヒロインが獲得した対策知識が、他のヒロインに伝播する現象である。特に「ヒロイン情報共有ネットワーク (通称：光の SNS)」の存在が確認されており、対策情報の伝播速度は推定 72 時間以内である。第三段階は「世代間適応」であり、新世代のヒロインが、先代の経験を「継承」した状態で登場する現象である。

深淵蜂 (217) は、この適応速度を定量化し、「ヒロイン適応係数 (HAC: Heroine Adaptation Coefficient)」を提唱した。 $HAC = \Delta R / (\Delta t \times S)$ (ΔR : 耐性変化量、 Δt : 経過時間、 S : 戦術の初期効果量) と定義され、暗黒暦 217 年の平均 HAC は 0.73 であった。これは、いかなる新戦術も平均 16.4 ヶ月で有効性が半減することを意味する。

5.2 第二の危機：勝利後虚脱症候群 (PVVS) の蔓延

予期せぬ問題として浮上したのが、組織構成員の心理的変容である。デスペラード人事部の全構成員健康調査 (n=34,521) により、暗黒暦 216 年度以降、組織内に広範な心理的不調が蔓延していることが明らかとなった。IHCRI 心理戦研究室はこれを「勝利後虚脱症候群 (Post-Victory Void Syndrome: PVVS)」と命名した。

PVVS の主要症状は以下のとおりである。第一に、「戦闘意欲の喪失」（全構成員の 38.7%が該当）。長年にわたり「負けること」を前提として自己アイデンティティを構築してきた構成員が、勝利という未知の状況に適応できない状態である。第二に、「ヒロインへの同情の増大」（27.3%）。制圧されたヒロインの苦痛を間近で目撃する機会が増加した結果、「ヒロインが可哀想」という感情が芽生える現象である。第三に、「存在意義の喪失」（43.1%）。世界征服が現実味を帯びてきた結果、「征服した後どうするのか」という問いに直面する構成員が急増している。

特に深刻なのは、幹部クラスにおける PVVS の発症率が一般戦闘員の 2.7 倍に達している点である。幹部心理カウンセリング室への相談件数は暗黒暦 216 年に前年比 340%増を記録し、最も多い相談内容は「ヒロインとの戦いが恋しい」（31.2%）、「勝っても虚しい」（28.9%）、「自分は本当に悪なのか分からなくなった」（22.4%）であった。

「正直に告白すると、あの子たちが苦しんでいるのを見るのがこんなに辛いとは思わなかった。負けていた頃は、ヒロインは我々を倒す強大な存在だった。でも今は……ただの、傷ついた少女に見える」——匿名幹部の証言（IHCRI 心理戦研究室カウンセリング記録 #4,891 より抜粋）

5.3 第三の危機：予算縮小圧力と「成功の罰」

勝利の増加は、逆説的に、IHCRI 研究予算の縮小圧力を生んでいる。デスペラード財務局は暗黒暦 217 年度予算案において、IHCRI 研究費を前年比 15%削減する方針を打ち出した。その論理は「すでに十分な成果が出ているのだから、これ以上の研究投資は不要」というものである。

この「成功の罰（Penalty of Success）」とも呼ぶべき事態に対し、暗黒所長は財務局に対する反論書を提出した（暗黒, 217b）。同書において暗黒は、「勝率 41.7%は歴史的快挙であるが、裏を返せば我々はまだ 58.3%の作戦で敗北している」と指摘し、特に 217 年度の成功率低下傾向がヒロインの適応進化によるものであることを強調した。しかし、財務局は「敗北率 58.3%は、従来の 96.8%と比較すれば十分に低い」と回答し、予算折衝は難航している。

また、怪人製造部門への予算配分にも問題が生じている。分類学的アプローチの成功により「高品質な怪人」の必要性が低下し、怪人一体あたりの製造費は暗黒暦 214 年の平均 4,200 万悪貨

から 217 年には 1,800 万悪貨へと大幅に削減された。結果、怪人の平均戦闘力が低下し、ヒロインの適応が追いついてきた場合に対処できないリスクが増大している。

5.4 第四の危機：「第六分類」出現の兆候

暗黒暦 217 年第 2 四半期以降、既存の 5 分類のいずれにも当てはまらないヒロインの出現が複数報告されている。IHCRI 分類判定室への「分類不能報告」は暗黒暦 216 年度の 7 件から 217 年度は既に 31 件に急増している。

これらの「分類不能型」ヒロインに共通する特徴として、深淵蜂（217b）は以下の 3 点を指摘している。第一に、複数の分類群の特性を同時に発現する「ハイブリッド能力」。第二に、戦闘中にリアルタイムで能力体系を書き換える「動的変容」。第三に、我々の分類学的知見を「知っている」かのような対応パターン。

第三の特徴は特に不穏である。あたかも我々の IHCRI Bulletin を購読しているかのごとく、分類群別攻略法の裏をかく行動を取るヒロインが確認されている。暗黒暦 217 年 7 月、光輝型に分類されていたヒロイン「オーロラ・ブレイブ」が、AT 波を浴びた直後に格闘型の戦闘スタイルに移行し、さらに魔法型の遠距離攻撃を組み合わせるという前例のない戦闘パターンを示した。この事例における我が支部の敗北は、控えめに言って壊滅的であった。

暗黒所長は、この「第六分類」問題を「分類学の存立基盤を揺るがしかねない最大の脅威」と位置づけ、暗黒暦 218 年度予算における最優先研究課題として提案している。仮称「超越型（Transcendent Type）」と名付けられたこの新分類群の体系化が急務であるが、その定義自体が「既存分類を超越する」という自己矛盾を含んでおり、分類学的枠組みそのものの再構築が必要となる可能性がある。

6. 特別報告 ― フェニックス現象の加速と進化

深淵蜂（214, 216）が継続的に研究してきた「フェニックス現象」――すなわちヒロインがピンチから復活する際に以前より強化される現象――は、分類学導入後、顕著な加速と質的変容を示している。

導入前のフェニックス現象における平均強化倍率は1.3倍（すなわち復活後の戦闘力が敗北前の130%）であった。しかし暗黒暦216年以降、同倍率は平均2.1倍に上昇し、極端な事例では4.7倍（前述のルナ・セレスティア事例における魔力247%回復）に達している。

この加速の理論的説明として、深淵蜂（217c）は「試練深度仮説（Ordeal Depth Hypothesis）」を提唱している。同仮説によれば、フェニックス現象の強化倍率は、ヒロインが経験するピンチの「深さ」に比例する。分類学的アプローチにより我々が与えるピンチがより効果的で深刻なものになった結果、逆説的に、フェニックス現象もより強力に発動するようになったのである。

すなわち、我々が精密にヒロインを追い詰めれば追い詰めるほど、復活時の強化がより劇的になるという、構造的な悪循環が生じている。深淵蜂はこれを「完全なる絶望が、完全なる希望を生む」と詩的に表現し、その論文の結論部で3分間沈黙したと記録されている。

「我々はヒロインをより効率的に苦しめる方法を開発した。その結果、ヒロインはより効率的に美しく復活するようになった。これは科学の勝利なのか、それとも我々はただ、より壮大な敗北の舞台を整えているだけなのか」――深淵蜂奇麗「フェニックス現象加速報告書」（暗黒暦217年）結語より

7. 結論と提言

本白書の分析により、以下の結論が導かれる。

第一に、暗黒（214）のヒロイン分類学は、デスペラードの戦術革命として歴史的成功を収めた。作戦成功率を3.2%から最大50.3%へと向上させた功績は、悲嘆学史上最大の実践的貢献として評価されるべきである。

第二に、しかしながら、この成功は新たな危機的課題を生成した。ヒロインの適応進化、PVVS、

予算縮小、第六分類の出現は、いずれも勝利がもたらした逆説的問題であり、我々はこれを「勝利のパラドクス」として認識し、対処せねばならない。

第三に、フェニックス現象の加速は、分類学的アプローチの構造的限界を示唆している。ヒロインを追い詰めるという行為自体がヒロインを強化するという循環構造は、戦術レベルではなく、パラダイムレベルでの転換を要求している可能性がある。

以上を踏まえ、本白書は以下の提言を行う。(1) 第六分類対策を最優先課題とし、暗黒暦 218 年度研究予算の 40%以上を配分すること。(2) PVVS 対策として、全構成員を対象とした「悪のアイデンティティ再確認プログラム」を実施すること。(3) フェニックス現象の加速に対処するため、「追い詰めずに勝つ」という新概念の研究を開始すること。(4) ヒロインの適応速度に対抗するため、戦術の更新サイクルを現行の年次から四半期に短縮すること。

最後に、私見を述べることを許されたい。暗黒暦 216 年、我々は初めて勝者となった。しかし勝者の座は、敗者の座と同様に、あるいはそれ以上に困難なものであった。ヒロインたちは敗北から立ち上がることにに関して天才的である。それは彼女たちの本質であり、存在理由であり、我々がどれほど精緻な理論で武装しようとも、最終的には覆されてきた歴史的事実である。分類学はその歴史に一石を投じた。だが、石を投じた水面はやがて静まり、水はもとの姿に戻る。我々はそのことを——悲嘆とともに、そしてどこか微かな安堵とともに——理解し始めている。

参考文献

- 暗黒絶学 (暗黒暦 214). ヒロイン分類学序説 ― 分類群別脅威度評価および最適攻略法の体系的研究. IHCRI Bulletin, 66(6), 1-42.
- 暗黒絶学 (暗黒暦 217a). 勝利時代における組織マネジメントの課題 ― 悪の経営学の視座から. 悲嘆科学, 45(2), 78-95.
- 暗黒絶学 (暗黒暦 217b). IHCRI 研究予算に関する財務局への反論書 (内部文書 #D-217-0893) . 統合悲嘆機構デスペラード.
- 暗黒絶学・螢火菜々美 (暗黒暦 213). デスペラード作戦成功率の長期的推移に関する統計的分析 (暗黒暦 190-213年) . 悲嘆科学, 41(4), 112-134.
- 螢火菜々美 (暗黒暦 213). 「とどめを刺す」発言とその後の逆転率に関する統計分析 ― 全作戦記録 2,847 件のメタアナリシス. IHCRI Bulletin, 65(8), 23-41.
- 螢火菜々美 (暗黒暦 214). 物理的接触がヒロイン戦闘意欲に及ぼす促進効果 ― 「吹き飛ばし」の逆効果に関する実験的研究. IHCRI Bulletin, 66(2), 56-73.
- 深淵蜂奇麗 (暗黒暦 214). フェニックス現象の定量的分析 ― ヒロイン復活時戦闘力増幅倍率の統計モデル. 悲嘆科学, 42(3), 201-224.
- 深淵蜂奇麗 (暗黒暦 215). アンチ・トランスフォーム波の最適照射タイミングに関する研究 ― 変身バンク映像 1,247 件の時系列分析. IHCRI Technical Report, TR-215-044.
- 深淵蜂奇麗 (暗黒暦 216). 感情触媒型魔力回復 ― フェニックス現象の極端型に関する事例研究. 悲嘆科学, 44(1), 67-89.
- 深淵蜂奇麗 (暗黒暦 217a). ヒロイン適応係数 (HAC) の提唱と計測手法. IHCRI Bulletin, 69(1), 12-28.
- 深淵蜂奇麗 (暗黒暦 217b). 分類不能型ヒロインの出現動向と「第六分類」問題. IHCRI Bulletin, 69(2), 1-19.
- 深淵蜂奇麗 (暗黒暦 217c). 試練深度仮説 ― フェニックス現象加速のメカニズムに関する理論的考察. 悲嘆科学, 45(3), 145-167.
- 氷結卿 (暗黒暦 216). 第 12 支部における格闘型ヒロイン制圧率改善事例報告書. デスペラード支部長会議資料, BSR-216-012.
- デスペラード人事部 (暗黒暦 217). 全構成員健康調査報告書 (暗黒暦 216 年度) . 内部資料 #HR-217-Annual.
- IHCRI 心理戦研究室 (暗黒暦 217). 勝利後虚脱症候群 (PVVS) の定義と診断基準に関する予備報告. IHCRI Internal Memo, IM-217-0156.
- 結城麗華 (暗黒暦 215). ヒロピン学序説 ― 苦難の美学と再起のカタルシス. Journal of Heropin Studies, 42(1), 1-38. ※敵側文献
- 結城麗華 (暗黒暦 217). フェニックス効果の美学的意義 ― 崇高なる再起の受容美学的考察. Journal of Heropin Studies, 44(2), 89-112. ※敵側文献

筆者紹介

暗黒 絶学（くらき ぜつがく）

統合悲嘆機構デスペラード ヒロイン対策総合研究所（IHCRI）所長。闇の大学院大学にて悲嘆学博士号取得。専門はヒロイン分類学、悲嘆戦略論。悲嘆学会大賞を3度受賞。暗黒暦214年に発表した「ヒロイン分類学序説」はデスペラードの戦術革命をもたらし、「暗黒新時代の父」と称される。近年はPVVS問題に強い関心を示しており、「我々もまたヒロインに救われていたのかもしれない」という発言が波紋を呼んでいる。趣味はヒロイン戦闘映像の収集（所蔵数24,000本超）。最近のお気に入り「プリズムスターの変身バンクの美しさは芸術の域に達している」とのこと。独身。

深淵蜂 奇麗（しんえんばち きれい）

統合悲嘆機構デスペラード IHCRI 上席研究員。闇の大学院大学にて悲嘆物理学博士号取得。専門はフェニックス現象研究、戦闘力定量分析。フェニックス現象の世界的第一人者であり、同現象の定量化手法の開発は悲嘆学に革命的貢献をもたらした。「ヒロイン適応係数（HAC）」の提唱者。最近「試練深度仮説」の検証に没頭しており、研究室にはヒロインの復活シーンの写真が壁一面に貼られている。本人は「研究資料」と主張しているが、同僚からは「それはファンの部屋だ」との指摘がある。日々の口癖は「美しい……」（ヒロインの復活データを見て）。既婚（配偶者は元ヒロイン、という噂があるが本人は否定している）。